

特 記 仕 様 書

甲府市令和5年度版「土木工事共通仕様書」によること。また、これに特に定めのない事項については、国土交通省 関東地方整備局令和7年3月改定「土木工事写真管理基準」、「甲府市建設工事写真電子納品要領」、山梨県県土整備部監修令和7年10月改定『建設工事必携』または日本下水道協会発行「下水道土木工事必携(案)」によること。

なお、契約工期には、近隣工事等の調整協力も含まれており、下水道工事は本路線を使用する宅内排水設備完了までに完成するよう工程計画を綿密に立て工期内完成検査を厳守すること。また、工事中途において諸問題が発生したときは、早期に監督員と協議し指示を受けること。

協議及び承諾に関する特記仕様

1. 設計内容に係る物はもちろん協議打合せに関する事項は、すべて〔工事打合簿〕によりその都度処理するものとし、了解・承諾のある前に施工した場合は、受注者の責任により行うこと。

施工上の注意に関する特記仕様

1. 本工事において、起工測量の結果を監督員に提出するとともに現地の状況を十分把握し安全性、施工性、細部構造等の検討を行い、受注者の責任において施工すること。
- また、労働安全衛生規則により、労働基準監督署に届けが必要がある場合はその写しを施工計画書または、工事打合簿により提出すること。
2. 工事着工前には、周辺の地権者・耕作者・役員等立ち会いのうえ、施工方法・施工時期等を説明しトラブルの無いようすること。また、必要に応じて立会一覧表にサイン等をもらい提出すること。
3. 公設柵の設置位置について、必ず地権者と立ち会い確認を行い、柵設置工事を行うこと。また、地権者との立ち会い結果により、公設柵設置位置が当初設計位置と大きく異なる際には、その旨を監督員に報告し、指示を受けること。
4. 下水道圧送管を施工する際は、水道の配管工と同等の資格を持つ者による施工とすること。

段階確認等に関する特記仕様

段階確認にあたり、受注者は共通仕様書によるほか、次のものとする。

1. 段階確認の施工計画作成
段階確認事項を確認、整理し、段階確認予定時期を記した「段階確認工程表」を作成する。なお、施工計画書に含めて提出しなければならない。
2. 社内検査の実施
段階確認を受ける前には必ず社内検査を実施し、設計図書どおりの施工がなされているか事前確認すること。また、検査結果を整理し、監督員から請求があった場合は提出しなければならない
3. 段階確認時の注意事項
段階確認においては、検査（確認）部分の出来形が確認できる資料を作成し、段階確認時に監督員に提示すること。
4. その他
段階確認の計画書について、監督員の承諾を得た場合は、受注者の様式により管理できる。

建設副産物処理に関する特記仕様

1. 建設廃棄物の適正処理及び県内中間処理施設での優先処理
建設工事の施工により発生するコンクリート塊、アスファルト塊等は、廃棄物処理法に基づく許可を取得している再資源化施設で適正に処分すること。また、再生資源利用計画(実施)書及び再生資源利用促進計画(実施)書を提出し、その内容を説明すること。
なお、本工事中から排出される廃棄物は、自県内処理が好ましいため、県内の再資源化施設で処分することに努めるものとする。
2. 処理方法
中間処理許可業者への委託処理
3. その他
① 工事受注後、速やかに施工計画書を監督員に提出し、承諾を得ること。
② 中間処理業者に委託する段階で、泥、ゴミ、木片、金属類等を混入させないこと。
③ 中間処理業者に持ち込み後、速やかに建設廃材の処理状況を作成し、監督員に提出すると共に、工事関係書類に添付すること。
④ 受け入れ数量及び、中間処理業者が明記された受領書を委託時に受け取り、工事関係書類に添付すること。
⑤ 地中部分の構造物について設計図書と異なる場合は、監督員と協議すること。
⑥ この特記仕様書に明記されていない場合は、監督員の指示に従うこと。
⑦ この特記仕様書によりがたい場合または、疑問を生じた場合は、監督員と協議すること。
4. 再生資源利用（計画・実施）書及び再生資源利用促進（計画・実施）書の提出
本工事は、建設副産物実施調査の対象工事であり、受注者は国土交通省のホームページから「建設リサイクル報告様式（計画書・実施書）（EXCEL 様式）」の最新バージョンをダウンロードし、作成出力した再生資源利用計画書及び再生資源利用促進計画書を出し、1部(紙)を施工計画書に添付し監督員に提出すること。（以前より使用していたクラスを使用した様式での提出は不可）
再生資源利用計画書及び再生資源利用促進計画書は、工事現場の見やすい場所に掲示（デジタルサイネージによる掲示も可）すること。
工完了後は速やかに、当初入力した工事データを実績値に修正した再生資源利用実施書及び再生資源利用促進実施書を出し、1部（紙）を完成書類に添付し、また、電子データを電子媒体（CD、DVD等）により監督員に提出すること。
なお、入力した工事データは自社で5年間保管すること。
＊入力時に最新版を国土交通省のホームページからダウンロードして入手すること。
URL http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/recycle/d03project/d0306/page_03060101credas1top.htm
5. 舗装版切断時に発生する濁水処理
舗装版切断時に発生する濁水は、廃棄物の処理及び清掃に関する法律に基づき、原則として収集し処分業の許可を取得している中間処理施設等へ運搬し処分すること。また、産業廃棄物管理表（マニフェスト）により適正に処理し、監督員に提示すること。
現場条件等により濁水の収集が困難な場合は、監督員と協議すること。
6. 建設発生土の搬出
建設工事の施工における建設発生土は、建設副産物処理基準〔4〕設計・積算・施工の3. 建設発生土の①指定処分Aにより処分するものとし、下記の場所に搬出すること。
① 搬入場所：北部開発株式会社 甲斐市牛勾字三石3619番1外33筆、甲斐市牛勾字入矢木羽3739番1外34筆、甲斐市牛勾字矢木羽沢3823番外1筆
② 運搬距離：入孔番号⑤11.2km、入孔番号⑥11.1km、入孔番号⑦11.1km
③ その他：(1) 搬出に際し、発生土について土質試験を行うこと。
(2) 土砂搬入時間は8:30から17:00までとし、日曜祝祭日は作業を行わないこと。また悪天候により閉鎖する場合がある。
(3) 搬出調査を作成し、監督員に提出すること。
(4) 工事発注後に明らかになったやむを得ない事情により、上記の指定により難い場合は、監督員と協議すること。
7. 建設発生土の搬出先市町村への情報提供
受注者は、本工事中から建設発生土を当該工事現場の市町村から、他の市町村へ100㎡（地山量）以上搬出する場合は、搬出前に指定様式により搬出先市町村の建設発生土担当窓口あてに建設発生土に関する次の情報を郵送・FAX等で提出しなければならない。
なお、情報提出後速やかにその写しを監督員に提出しなければならない。
① 工事件名、工事概要、工事場所
② 工事発注機関名、工事発注機関監督員名、連絡先
③ 工事受注業者名、現場代理人名、連絡先
④ 建設発生土の運搬業者名
⑤ 建設発生土の受入先名（搬出先事業所名等）、住所
⑥ 建設発生土の発注場所から受入先までの運搬経路
⑦ 建設発生土の搬出時期
⑧ 建設発生土の土質（砂、ローム等）、土量（㎡）
※搬出先市町村担当窓口については、監督員に問い合わせること。
8. 建設リサイクル法対象建設工事の届出に係る事項の説明等
本工事は、建設リサイクル法の対象工事である。
落札者は、建設リサイクル法第12条に基づき、落札後配付される書面により契約事務担当に、契約前に説明を行うこととする。

安全・訓練等の実施に関する特記仕様

1. 安全・訓練等の実施
本工事の施工に際し、現場に則した安全・訓練等について、工事着手後、原則として作業員全員の参加により月当り半日（4時間）以上の時間を割り当て次の項目から実施内容を選択し安全・訓練等を実施すること。
① 安全活動のビデオ等視覚資料による安全教育
② 本工事内容等の周知徹底
③ 土木工事安全施工技術指針等の周知徹底
④ 本工事における災害対策訓練
⑤ 本工事現場で予想される事故対策
⑥ その他、安全・訓練等として必要な事項
2. 安全・訓練等に関する施工計画書の作成
施工に先立ち作成する施工計画書に、本工事の内容に応じた安全・訓練等の具体的な計画を作成し、監督員に提出すること。
3. 安全・訓練等との実施状況報告
安全・訓練等の実施状況をビデオ等または工事報告（工事日誌等）に記録し、工事完成時に提出すること。なお、工事期間中であっても監督員が実施状況の確認を必要とする場合は、すみやかに提示すること。

安全管理に関する特記仕様

1. 交通管理

工事区域内の円滑な道路交通を確保するために、山梨県県土整備部発行の「道路工事交通保安施設設置基準書(令和6年2月15日適用)」(以下、基準書)に示した安全施設について、工事現場内における標示施設・防護施設の設置及び交通誘導員の配置、並びにこれらの管理の取り扱いを次のとおりとする。ただし、現場の状況により柔軟に対応し、第三者の安全には充分留意すること。

2. 一般事項

- ① 工事を行う場合は、所轄警察署、道路管理者との協議及び安全施設類設置参考図書に基づき必要な道路標識の設置、交通誘導員の配置を行うほか工事の起終点に必要な標示板を設置する。
- ② 夜間作業または昼夜間作業を行うときは、通行者に工事区間及び通行制限状況が明確に確認できるように必要な措置をとる。
- ③ 一般車両の侵入を防ぐ必要がある場合は、両面にバリケードを設置し、交通に対する危険の程度に応じて、赤ランプ、標柱等を用いて現場を囲む。
- ④ 工事現場における標示板及び防護施設は、堅固な構造とし所定の位置に整然と設置し、修繕・塗装・清掃等の維持及び保守点検を常時行うほか、夜間において遠方から確認し得るよう照明または反射装置を施すこと。
- ⑤ 「片側交互通行」にて工事を行う場合は、通行を許す部分の路面は常に良好な状態に維持して交通に支障がないようにすること。
- ⑥ 施工に先立ち作成する施工計画書または工事打合簿に本工事の内容に応じた保安施設配置図等の具体的な計画を作成し、監督員に提出すること。

3. 特記事項

- ① 交通制限の形態
所轄警察署、道路管理者等との協議によるものとする。また、原則として掘削箇所は、即日埋め戻しを行い、仮復旧を行う(即日復旧)ものとする。
- ② 安全施設の設置時間
作業時間中は、基準書等により交通整理員を配置する。
現場着工前2週間以上前に工事予告板を設置する。
現場着工時に基準書等により、必要な安全施設を設置する。
工事終了後、現場の後片付け等、交通開放に充分安全な期間まで、安全施設を設置し、現場を管理すること。
- ③ 夜間作業を休止する時間は、通行者に明確に現場の状況が判別できるよう、十分な照明、保安灯等を配置すること。
- ④ 休憩時間等、作業を休止する場合も、通行者の安全に充分留意し、必要に応じて、交通誘導員を配置すること。
- ⑤ 所轄警察署、地域住民等、第三者との協議による安全施設の変更は柔軟に対応し、交通の安全には十分留意すること。
- ⑥ 警察署からの道路使用許可書(写し)を施工計画書または工事打合簿に添付し提出すること。
また、変更が生じた場合も変更施工計画書または、工事打合簿に添付し提出すること。

4. 交通誘導員

本工事の施工に際し、現場の安全管理のために次のとおり交通誘導員による交通誘導警備業務を実施すること。なお、⑤の(1)から(8)に掲げる路線で当該業務を行う場合は、1級または2級の交通誘導警備業務検定合格警備員を、場所毎に1人以上配置すること。また、配置された検定合格警備員は検定合格証明書を携帯し、現場着工前には検定合格証明書の写しを提出すること。
なお、特記仕様書によりがたい場合は、監督員と工事協議書により別途協議すること。

- ① 交通誘導員の配置箇所： 市道(昼間・夜間施工)
県道(夜間施工)
- ② 交通誘導員の配置人員： 人孔番号⑤ 市道 昼間施工5人(内交替要員1名)28日間
人孔番号⑥ 市道 夜間施工4人(内交替要員1名)19日間
人孔番号⑦ 市道 夜間施工4人(内交替要員1名)22日間
管路番号⑫ 市道 夜間施工3人(内交替要員1名)14日間
- ③ 交通誘導の時間帯： 人孔番号⑤ 昼間8:00～17:00実働8時間
人孔番号⑥、⑦、管路番号⑫ 夜間20:00～29:00実働8時間
- ④ 交通誘導の期間： 昼間概ね28日間 夜間概ね55日間
- ⑤ 警備員等の検定に関する規則第2条の規定に基づき、山梨県公安委員会が認定する主要路線は次のとおりである。
(1) 国道20号： 山梨県の全域 (2) 国道52号： 山梨県の全域
(3) 国道137号： 山梨県の全域 (4) 国道138号： 山梨県の全域
(5) 国道139号： 山梨県の全域 (6) 国道140号： 山梨県の全域
(7) 国道141号： 山梨県の全域 (8) 国道358号： 山梨県の全域

5. 工事における安全施工

山梨県県土整備部発行の「土木工事安全施工技術指針(令和6年4月改正)」によること。

工事カルテに関する特記仕様書

受注者は、工事実績情報サービス(CORINS)入力システム((財)日本建設情報総合センター)に基づき、受注・変更・完成・訂正時に工事実績情報として「登録のための確認お願い」を作成し監督員の確認(機関印または監督員の記名・押印及び電子メールアドレスを記入)を受けたうえ、(財)日本建設情報総合センターに登録申請するとともに、「登録内容確認書」の写しを監督員に提出しなければならない。提出の期限は、以下のとおりとする。

- ① 受注時登録データの提出期限は、契約締結後10日以内(土・日曜日及び祝日等を除く)とする。
- ② 完成時登録データの提出期限は、業務完成後10日以内とする。
- ③ 業務履行中に、受注時登録データの内容のうち、「工期」または「現場代理人」または「監理・主任技術者」に変更があった場合は、変更があった日から10日以内(土・日曜日及び祝日等を除く)に変更データを登録申請しなければならない。工事請負代金のみ変更の場合は、原則として登録を必要としない。ただし、工事請負代金2,500万円を超えて変更する場合には変更時登録を行うものとする。
- ④ 訂正時は、適宜登録機関に登録申請をしなければならない。

関係法令等の遵守と手続きに関する特記仕様書

工事施工にあたっては、河川法、道路法、道路交通法、建設工事公衆災害防止対策要綱、労働安全衛生法等、関係諸法令、諸官庁の通達、工事施工に関する協定事項等を遵守し、諸官庁署への届出及び許可等の手続きは、すみやかに行い監督員に報告すること。

工期に関する特記仕様書

本工事の工期は、雨天・日曜日・祝日及び夏季休暇・年末年始休暇のほか、作業期間内の全土曜日を含んでいる。
ただし、やむを得ず休日に作業を行う必要がある場合は、監督員に届け出ること。

建設機械に関する特記仕様書

- 1. 本工事において以下に示す建設機械を使用する場合は、「特定特殊自動車排出ガスの規制等に関する法律(平成17年法律第51号 最終改正令和4年法律第68号)」に基づき技術基準に適合する機械、または、「排出ガス対策型建設機械指定要領(平成3年10月8日付建設省経機発第249号 最終改正平成22年3月18日付国総施第291号)」、「排出ガス対策型建設機械の普及促進に関する規定(平成18年3月17日付国土交通省告示第348号 最終改正平成24年3月23日付国土交通省告示第318号)」もしくは「第3次排出ガス対策型建設機械指定要領(平成18年3月17日付国総施第215号 最終改正平成28年8月30日付国総環第6号)」に基づき指定された排出ガス対策型建設機械を使用すること。ただし、平成7年度建設技術評価制度公募課題「建設機械の排出ガス浄化装置の開発」、またはこれと同等の開発目標で実施された民間開発建設技術の技術審査・証明事業、もしくは建設技術審査証明事業により評価された排出ガス浄化装置を装着した建設機械についても、排出ガス対策型建設機械と同等と見なすことができる。また、国土交通省のホームページにより確認すること。
<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kensetsususekou/kankyuu/mic/mic.htm#manual>

ただし、これにより難しい場合は、監督員と協議のうえ設計変更すること。
また、排出ガス対策型建設機械あるいは、排出ガス浄化装置を装着した建設機械を使用する場合、施工現場において使用する機械の写真撮影を行い監督員に提出すること。なお、指定機械であることを識別するラベルが添付されているので、確認できるように撮影すること。

- 2. 本工事において、「建設工事に伴う騒音振動対策技術指針(昭和51年3月2日 建設省経機発第54号、建設大臣官房技術参事官から各地方建設局あて 最終改正昭和62年3月30日 建設省経機発第58号)」に基づき、低騒音型・低振動型建設機械の使用原則を図る場合は、「低騒音型・低振動型建設機械の指定に関する規程(平成9年7月31日 建設省告示第1536号 最終改正平成13年4月9日 国土交通省第487号)」に基づき指定された建設機械を使用すること。
ただし、これにより難しい場合は、その事由を証明する書類を提出の上、監督員と協議すること。
また、施工現場において指定機械であることを識別するラベルが確認できるように、建設機械を写真撮影し、監督員に提出すること。

機 種	備 考
一般工事用建設機械 ・バックホウ ・トラクタショベル(車輪式) ・ブルドーザ ・発動発電機(可搬式) ・空気圧縮機(可搬式) ・油圧ユニット(以下に示す基礎工事用機械のうち、ベースマシーンとは別に、独立したディーゼルエンジン駆動の油圧ユニットを搭載しているもの) 〔油圧ハンマ、パイプロハンマ、油圧式鋼管圧入・引拔機、油圧式杭圧入・引拔機、アースオーガ、オールケーシング掘削機、リパースサーキュレーションドリル、アースドリル、地下連続壁施工機、全回転型オールケーシング掘削機〕 ・ローラ類 〔ロードローラ、タイヤローラ、振動ローラ〕 ・ホイールクレーン	ディーゼルエンジン(エンジン出力7.5kw以上260kw以下)を搭載した建設機械に限る。

管基礎に関する特記仕様

- 管基礎については、設計図書に定めるところのほか、次の特記事項により施工すること。
- ① 砂基礎
設計図書に指定された砂を所定の厚さまで締固めて仕上げたのち、管を布設・固定して更に砂を各層15cm毎に敷均し、締固めて空隙が生じないように仕上げること。
- ② 砕石基礎
設計図書に指定された砕石をムラなく敷均し突き固めて所定の厚さまで仕上げたのち、管を布設・固定して更に砕石を所定の高さまで敷均し、十分に突き固めて仕上げること。
管側部は一層仕上がり厚が20cm以内とし、一層ごと木だこ又は足踏みで確実に締め固めること。
管上部の仕上がり厚みは、砕石を15cm毎に敷き均し、管に衝撃を与えないように衝撃力の小さい振動コンパクター等で十分締め固めること。ただし、管直上部は、振動コンパクターを使用すると振動により十分に締め固まらないおそれがあるので、木だこ又は足踏みにより締め固めること。
- ③ その他
リップ塩ビ管を布設する場合は、リップの間に基礎材が確実に充填されるよう十分留意すること。
下水道用標識シートは、管の上部30cmまでの埋戻し及び締固めを行った後、当該部へ人孔から人孔まで切れ目なく布設すること。

埋戻しに関する特記仕様

- 埋戻しに使用する土は、設計図書に指定されたものとし、塵芥その他の有害物は用いないこと。
- 埋戻し工及び掘削工は、工程に基づき、確実に連携を保ちながら施工すること。
- 埋戻しは、必ず排水したのちに実施し、水中埋戻しは行わないこと。
- 埋戻しは、指定された埋戻し用の砂または良質土を使用し、設計図書で指定しない限り一層20cm以下に敷広げて、十分締固めを行い、沈下が生じないように施工すること。なお、構造物の周辺は特に念入りに締固めを行うこと。
- 埋戻しの際には、管渠・下水道用標識シート・その他の構造物に損傷、管の移動等が生じないように施工すること。
- 埋戻しを行うに当たっては、地盤に存在する有害な雑物をその施工に先立って除去すること。
- 埋戻し後、復旧までの期間常時埋戻し路面の維持補修に努めること。
- 埋戻し路床仕上げ面は、均一な支持力が得られるよう施工すること。
- 粒度調整路盤材の締固めを行う場合、修正CBR試験によって求めた最適含水比付近の含水比で締固め、所定の支持力、または密度が得られるよう仕上げること。
- 前項の支持力については、道路占用許可条件によること。
- 砕石による埋戻しは、平均粒径(D50)が10mm以上かつ10%粒径(D10)が1mm以上の砕石を用いること。
- 埋戻し締固め度管理については、締固め度90%程度以上を確保し、原則として埋戻し土量が1,500m未満の工事については1工事あたり3回以上、1,500m以上の工事については500mにつき1回の頻度で所要な試験を行い、その結果を監督員に提出すること。
なお、これによりがたい小規模工事の場合は、監督員と協議により決定すること。
- 第三者が行う調査及び試験に対して、監督員より指示があった場合は、所要な調査及び試験を行い、その結果を監督員に提出すること。

一般舗装に関する特記仕様

- アスファルト舗装及び路盤の施工に先立って、路床面または路盤面の浮土、その他の有害物を除去し、清掃すること。
- 基層及び表層における加熱アスファルト混合物を敷均したときの混合物の温度は110℃以上で、一層の仕上がり厚さは7cm以下とすること。また、混合物の搬出時の温度は必要に応じて協議すること。
- 混合物を運搬する場合は、清浄で平滑な荷台を有するダンプトラックを使用し、ダンプトラックの荷台内面には、混合物の付着を防止する油または溶液を薄く塗布すること。なお、混合物運搬時の温度低下を防ぐために運搬中は、シート類で覆うこと。
- 混合物の敷均しにあたっては、路盤の表面が湿っている場合や気温が5℃以下のときに施工してはならない。また、作業中雨が降り出した場合は、敷均し作業を中止し、すでに敷均した箇所の混合物をすみやかに締固めて仕上げを完了させること。
- 混合物の継目を締固めて密着させ平坦に仕上げること。すでに舗装した端部の締固めが不足している場合や、亀裂が多い場合は、その部分を切り取ってから隣接部を施工すること。
- 表層と基層の各層の縦継目の位置を15cm以上、横継目の位置を1m以上ずらすこと。また、縦継目は、車輪走行位置の直下からずらして設置すること。なお、表層は原則としてレーンマークに合せること。
- プライムコートは施工後に交通開放する場合は、瀝青材料の車輪への付着を防ぐため、粗目砂等を散布すること。また、交通によりプライムコートがはく離した場合には、再度プライムコートを施工すること。
- 監督員の指示がない場合は、舗装表面温度が50℃以下になってから交通開放を行うこと。
- 第三者が行う調査及び試験に対して、監督員より指示があった場合は、所要な調査及び試験を行い、その結果を監督員に提出すること。

人孔鉄蓋・柵蓋等に関する特記仕様

- 組立マンホールの鉄蓋は、特記なき限り甲府市型グラウンドマンホール〔標準型〕を使用すること。
- 小型マンホールの鉄蓋は、特記なき限り甲府市型小型マンホール用保護鉄蓋及び中間柵・底板を使用すること。
- 公設柵の柵蓋は、特記なき限り甲府市章が蓋表面に入った柵用密閉鉄蓋を使用すること。
- 工事期間中に交通開放する場合には安全管理に留意すること。

アスファルト混合物及び再生アスファルト混合物の使用に関する特記仕様

- 認定混合物の仕様
受注者は、本工事に使用するアスファルト混合物及び再生アスファルト混合物について、「アスファルト混合物事前審査」の認定を受けた混合所の認定混合物を使用する場合は、認定書の写しを監督者に提出するものとし、この場合の品質管理は「アスファルト混合物事前審査における土木仕様書」及び「アスファルト混合物事前審査制度における品質管理基準(試行)」(山梨県県土整備部)によるものとする。
- 再生アスファルト混合物の骨材
本工事に使用する再生密粒度アスファルト混合物の骨材には、甲府・県東クリーンセンターから生成される溶融スラグ(QIS A 5032)を使用すること。
なお、溶融スラグの品質、配合、取り扱い等については、山梨県県土整備部「溶融スラグ有効利用ガイドライン」(平成16年5月制定 平成29年10月改定)に準拠し、施工前に当該ガイドラインで定める溶融スラグ試験管理票及び、各試験結果表を監督員に提出し確認を受けること。
また、日打設量が少量(10t以下)の仮復旧等の工事には適用しないものとする。

創意工夫・工事特性・社会性等の実施状況に関する特記仕様書

受注者は、工事施工において、自ら立案実施した創意工夫や工事特性への対応に関する項目、または地域社会への貢献として評価できる項目に関する事項について、所定の様式により提出することができる。実施前には計画書を監督員に提出し確認を受けること。

地下埋設物に関する特記仕様書

受注者は工事着手前に、既存地下埋設物等を調査し、その位置及び深度等を確認しておくこと。また、その埋設物の管理者と十分協議し、施工を行うこと。

主任技術者又は監理技術者の専任を要しない期間に関する特記仕様

- 請負契約の締結後、現場施工に着手するまでの期間（現場事務所の設置、資機材の搬入又は仮設工事等が開始されるまでの期間：工事始期日以降30日以内）については、主任技術者又は監理技術者の工事現場への専任を要しない。なお、現場施工に着手する日については、請負契約の締結後、監督員との打合せにおいて定める。
- 工事完成後、検査が終了し（発注者の都合により検査が遅延した場合を除く。）事務手続き、後片付け等のみが残っている期間については、主任技術者又は監理技術者の工事現場への専任を要しない。なお、検査が終了した日は、発注者が工事の完成を確認した旨、受注者に通知した日とする。

事業損失防止に関する特記仕様書

- 工事施工期間中は、地盤沈下、振動等の測定及び沿道の調査について監督員と協議し、必要と認められるものについて行うものとする。
- 地盤沈下及び移動の測定方法
工事起終点前後50m間を含む工事区間の両側、官境界及び道路面上の縦断測定を範囲とする。
 - 沿道調査
施工区域の地盤及び道路構造物の変位変形を測量、写真撮影などにより施工前、施工中、施工後及び必要に応じて随時行うこと。
 - 騒音・振動調査
騒音・振動調査について、必要な場合には監督員と協議のうえ調査を行うこと。
 - その他
規格・仕様書に規定がある試験または必要と認められる試験は、監督員の指示により受注者の負担で実施しなければならない。
- 工事施工箇所の近隣の建物等について
 - 調査内容
柱、壁、屋根、基礎等の構造物及びタイル張面、建具等の傾斜や損害状況と門、塀、コンクリート叩き、井戸等の工作物についても調査を行い、工事との因果関係が把握できるようにすること。
なお、調査については、地盤変動影響調査算定要領(平成24年3月30日付国土用第51号 最近改正令和4年12月1日付国不用第38号)によること。
 - 調査内容の提出部数
正1部、副は電子データとする。
- 工事施工期間中沿道に被害があった場合は、速やかに状況を調査し、監督員に報告しなければならない。
- ここに定めなきことは、受発注者との協議により決定する。

保険の付保及び事故の補償等に関する特記仕様書

1. 受注者は、工事現場または事業場内に「建設業退職金共済制度適用事業主工事現場」の標識を掲示しなければならない。
2. 受注者は、工事契約締結後1ヶ月以内に建退共制度の発注者用掛金収納書を提出すること。ただし、工事契約締結当初は工場製作の段階であるため建退共制度の対象労働者を雇用しないこと等の理由により、期限内に発注者用掛金収納書を提出できない事情がある場合においては、あらかじめ監督員に申し出ること。
3. 受注者は、工事の施設に必要な土地・立木・施設等を撤去または損傷を与えた場合には、原形同等以上に復元しなければならない。また、既存樹木は、日照、通風、地下水等の生育条件をできるだけ変化させないような配慮をし、掘削等に伴う根系切断への対応のほか、周辺の地形の変化による生育基盤の変化等への対策を行うこと。
4. 瑕疵の修補または損害賠償の請求期間は、公共工事請負契約書第44条第2項に示すほか、次のとおりとする。植栽等1年。植栽等とは、樹木・地被類とする。ただし、移植及び根回し工事は適用除外とする。

法定外の労災保険の付保に関する特記仕様

本工事において、受注者は法定外の労災保険に付さなければならない。

下請施工体系図の作成及び提出に関する特記仕様

1. 「甲府市暴力団排除条例の施行に伴う、公共工事からの暴力団排除」を目的として、受注者は、下請負者を用いる場合には、金額・工種の如何にかかわらず、末端の下請負者まで反映させた「下請施工体系図」を作成し、遺漏・誤謬が無いよう記載内容を十分確認の上、遅滞なく監督員へ提出すること。
2. 提出した「下請施工体系図」の内容に変更が生じた場合は、その都度変更するものとし、遅滞なく監督員へ提出すること。
3. 提出は打合簿によるものとする。ただし、メールによる提出も可能なものとし、この場合は、後日、打合簿を提出すること。

土木工事写真管理基準に関する特記仕様

1. 本工事において、土木工事共通仕様書及び関東地方整備局土木工事写真管理基準に基づき写真管理を行うこと。また、納品方法については、甲府市建設工事写真電子納品要領を適用すること。
2. 工事写真の検査は、電子データで検査することを原則とするが、印刷物または電子データと併用で検査することも可能とし、その範囲は受発注者との協議による。また、検査に使用する機器の準備と操作は、受注者が行うことを原則とする。
3. ここに定めなきことは、受発注者との協議により決定する。

週休2日制適用工事に関する特記仕様

1. 本工事は、週休2日適用工事として、月単位の週休2日により取り組むことを標準とし、さらに、質の向上を図る完全週休2日（土日）に取り組むこともできる。
2. 週休2日の取り組みについては、施工計画書により提出すること。
3. 取り扱いについては、令和7年5月15日から適用する「週休2日制適用工事実施要綱」及び「週休2日制適用工事に要する費用の計上について」による。

余裕期間制度の適用に関する特記仕様

1. 主任技術者等の専任期間
 - ① 契約締切日の翌日から工事の始期までの期間については、主任技術者又は監理技術者及び現場代理人の設置を要しない。
 - ② 工事の始期から現場施工に着手するまでの期間については、主任技術者又は監理技術者の工事現場への専任を要しない。なお、現場施工に関する日については、請負契約の締結後、監督員との打合せにおいて定める。
 - ③ 工事完成後、検査が終了し（発注者の都合により検査が遅延した場合を除く。）、事務手続、後片付け等のみが残っている期間については、主任技術者又は、監理技術者の工事現場への専任を要しない。
なお、検査が終了した日は、発注者が工事の完成を確認したうえ、受注者に通知した日（例：「完成検査結果通知書」等における日付）とする。
2. 工期
 - ① 本工事は、受注者の円滑な工事施工体制の確保を図るため、事前に建設資材、労働者確保等の準備を行うことができる余裕期間（フレックス方式）を設定した工事であり、発注者が示した余裕期間の終期とすることができ、余裕期間の日の翌日までの間で、受注者は工事の始期を任意に設定できる。
なお、余裕期間を設定する場合は、契約日に工事の始期を発注者に工事開始日設定通知書により通知しなければならない。
なお、余裕期間設定後に余裕期間の変更が必要となった場合には監督員と協議すること。
 - ② 工事の始期までの余裕期間内は、現場代理人の常駐義務や主任技術者又は監理技術者を設置することを要しない。また、現場に搬入しない資材等の準備を行うことができるが、現場への資材の搬入や仮設物の設置等、工事の着手を行ってはならない。なお、余裕期間内に行う準備は受注者の責により行うものとする。

工期：令和7年12月16日から令和8年8月12日まで
工事開始日：令和7年12月16日から令和8年2月13日の間で受注者が選択する日
※契約時に工事開始日設定通知書の通知がない場合は、余裕期間を設定できない。
※余裕期間選定後の余裕期間の変更については、選定した工事開始日の7日前までであれば、変更理由が記載された工事打合簿により変更協議可能とする。

なお、低入札価格調査等により、必要とした日数を余裕期間から控除する。また、調査等により工事の始期予定日以降に契約締結となった場合には、余裕期間は適用しない。
3. 工事カルテ（CORINS）への登録
主任または、監理技術者の従事期間は、実工事期間をもって登録するものとする。
（着手前に余裕期間を含まいことに留意するものとする。）

特記仕様書（人孔耐震化工編）

1 一般事項

- (1) この仕様書（以下「本仕様書」という。）は、甲府市上下水道局（以下「発注者」という。）が管理する下水道管路施設の改良工事である「下水道改良工事（地震対策 R7-4）（余フ）」（以下「本工事」という。）に適用するものとする。
- 本仕様書は人孔耐震化工についての内容を補完するものであるが、本工事に際しては、別の特記仕様書による規定も遵守すること。
- (2) 本仕様書に定めのない事項については、甲府市監修『土木工事共通仕様書 -令和 5 年度版-』及び山梨県県土整備部監修『建設工事必携 -令和 7 年 10 月版-』により定められた規定、その他関係法令等を遵守すること。

2 工事概要

本工事は、『甲府市下水道総合地震対策計画』に基づき耐震診断を行った結果、耐震化補強対象となった人孔の耐震化を行うものである。

工事概要は次のとおりである。

(1) 工事概要

1) 工 事 名	下水道改良工事（地震対策 R7-4）（余フ）
2) 工 事 場 所	甲府市中中央三丁目地内ほか
3) 人 孔 番 号	⑤J119134059 ⑥J119134058 ⑦J119134057
4) 人 孔 寸 法	⑤幅 3.60m×長 4.97m（五角形） ⑥幅 2.00m×長 2.00m ⑦幅 2.00m×長 2.80m
5) 人 孔 形 式	矩形特殊人孔
6) 人 孔 深	⑤3.46m ⑥3.76m ⑦3.77m
7) 流 出 管	⑤HP φ 1350mm（円形） ⑥HP φ 1350mm（円形）（更生管 φ 1260mm） ⑦HP φ 1350mm（円形）
8) 流 入 管	⑤HP φ 1500mm（円形） ⑥HP φ 1350mm（円形） ⑦HP φ 1350mm（円形）（更生管 φ 1260mm）
9) 設 置 年 度	⑤・⑥・⑦昭和 41 年度
10) 作 業 区 分	⑤は昼間施工、⑥・⑦・⑫は夜間施工とする。
11) 工 法 分 類	RC 増厚工法

複合人孔更生工法

管口可とう化工法

耐震可とう継手工

(管きょ更生工 (K117133053) の上下流管口を含む)

マンホール浮上抑制対策工法

12) 対象人孔数 3箇所

3 施工内容

(1) 事前処理工

1) 人孔内清掃

人孔の耐震補強工事を施工するに先立って、高圧洗浄車を用いて清掃作業を行うこと。また、作業に必要な洗浄水は請負者が確保し、清掃により発生した土砂については、甲府市浄化センター（甲府市大津町 1645）内の指定場所に搬入すること。搬入時間の予定が判り次第、監督員に連絡し、事前に指示を仰ぐこと。

2) 仮排水管の設置

仮排水設備は、晴天時汚水量以上を排水できるバイパス管とする。また、雨天時の対応も可能な設備とし、事前に把握できる大雨等に対する対策は監督員と協議し、施工計画に明記すること。

3) コンクリート劣化部の除去

コンクリートの取壊し及び劣化部の除去は、超高压水による切削又は手ハツリ等により行う。頂版及び側壁における劣化部の除去厚は 1cm 未満とし、ハツリ又は切削後の躯体には、適切な時期に目荒しを施す。なお、鉄筋の腐食が進行し頂版の落下が懸念される場合は監督員と協議を行い、内部支保工を設置するなど作業員の安全性を確保すること。

4) 露出鉄筋の防錆処理

鉄筋が露出して錆びている箇所は、 possible の限り鉄筋の裏側まで切削し、防錆材が塗布できるようにする。錆の除去はワイヤブラシ等で行い、鉄筋の汚れや水分を除き、防錆材を塗布する。防錆材料については監督員と協議すること。

5) 止水工

断面修復及びコンクリート増厚補強の前に浸入水箇所や隙間の処理を行う。浸入水の処理は、V 型又は U 型ピックハンマー、ノミ等により躯体の一部をはつり、その箇所に急結性止水材をコテ、専用ガン等でコーキングし、表面仕上げして補修する。また、隙間等に充填するモルタルは、断面修復用の無収縮モルタル（圧縮強度 24N/mm² 以上）を使用する。

(2) 人孔耐震化工

1) あと施工アンカー工

1. 接着系アンカーを使用し、それ以外の場合は監督員と協議のこと。
2. 接着剤は、樹脂カプセル型の有機系のものとし基本接着強度（10N/mm²）とする。

3. アンカー孔内の切粉やゴミは専用ブラシ・ブロアーを使用して念入りに清掃すること。
4. 削孔は適切に行うこととするが、躯体の状況などにより確実な効果が期待できないと想定される場合は、 $2.5d$ 以上離して再度削孔を行う。なお、当初の削孔箇所はモルタルにて確実に補修すること。

2) 断面修復及び増厚補強工

1. 劣化部 1cm を除去して断面修復する場合は、無収縮モルタルで圧縮強度 ($24\text{N}/\text{mm}^2$) 以上を使用し、左官コテ塗り又は吹付工法で施工する。それ以外の場合は監督員と協議すること。
2. 頂版や側壁をRC増厚補強する場合は、下記品質規格のポリマーセメントモルタルを使用し、左官コテ塗り又は吹付工法で施工する。それ以外の場合は監督員と協議のこと。

ポリマーセメントモルタル品質規格

- ・圧縮強度 ($24\text{N}/\text{mm}^2$) 以上
- ・下地コンクリートとの接着性 ($1.5\text{N}/\text{mm}^2$) 以上

3. 底版のRC増厚補強は、圧縮強度 ($24\text{N}/\text{mm}^2$) 以上のコンクリート人力打設とする。それ以外の場合は監督員と協議のこと。
4. 既設躯体に型枠を固定するセパアンカーを使用する場合は、型枠を固定できるアンカー本数とし、使用するアンカーに適したドリルで穿孔、清掃、打ち込みを行う。また、増厚に応じたセパレータを使用する。脱型後にはPコーン後のモルタル詰めで仕上げる。

3) 人孔上部耐震化工について

人孔円形部（人孔上部構造体）の補強は、レベル2地震動に対応する耐震性能を有する複合人孔更生工法により施工する。また、後述4の規定により、請負者による設計工法以外の工法選定について、発注者が施工承認した場合は、承認した工法の施工内容とする。

(3) 管口可とう継手工

- 1) 管口可とう継手工の設置が設計図に基づいて施工できない場合には、監督員と協議し管口より 1.0m 以内の適切な位置に設置する。
- 2) 管を切削して誘導目地により可とう性を確保する場合は、管渠の管厚を確認した上で適切な深さまで切削を行う。
- 3) 誘導目地の施工にあたり、ステンレススリーブと固定金具、ゴムスリーブを管渠内に丁寧に取り付けなければならない。

(4) 繊維強化プラスチック材（FRP 格子筋）による底版の補強工

- 1) 既設の底版を手ハツリ等により所定の厚さ切削し、清掃により不純物を除去して平滑にする。
- 2) FRP 格子筋は、既設コンクリートにアンカー等で所定の被りとなるように固定する。

- 3) 増厚材（ポリマーセメントモルタル）は、「FRP グリッド増厚・巻立て工法によるコンクリート構造物の補修 補強」設計・施工マニュアル（案）に準じた材料とし、良好な強度発現が得られるように練り混ぜ作業を行う。
- 4) 既設コンクリートが湿潤状態にある場合はプレウエッティングを実施し、乾燥状態にある場合には、使用したポリマーセメントモルタルに規定されたプライマー材を塗布してからコテ塗で増厚する。

4 人孔浮上抑制対策工

- (1) 地下埋設物等によりドレーン管が設計図に基づいて施工できない場合には、監督員と協議し位置を決めなければならない。
- (2) 地盤のオーガーでのほぐしや、鋼管の圧入は、周囲への騒音・振動に十分留意して行う。
- (3) 消散管は、地下水位より高い位置とし、かつ土被り 1.0m 以上を確保し、人孔内に消散する。

5 安全管理

(1) 一般事項

- 1) 耐震化工の施工においては、材料・使用機器の十分な点検や適正な使用を心掛け、作業責任者の監視のもとでの作業等に留意し、事故発生の防止に努めること。
- 2) 管路施設（人孔）内作業時は、酸素欠乏危険作業主任者を定め現場に常駐させ、酸素濃度・硫化水素濃度等を計測するとともに、人孔内の換気を十分に行うこと。
- 3) その他、道路使用条件や安全管理対策等について施工計画書に明記すること。
- 4) 作業中は気象情報に十分注意を払い、豪雨出水及び地震等が発生した場合は、直ちに対処できるような対策を講じておくこと。なお、大雨等に関する気象情報により、相当の降雨が事前に予想される場合には、原則として当日の工事を中止すること。

(2) 局地的な大雨に対する安全対策

- 1) 仮排水管で通水しながらの工事となることから、次の事項に係る安全管理計画を施工計画書に記載し、この内容について監督員の確認を得ること。また、作業員に対して安全管理計画の内容を周知させること。
 1. 現場特性の事前把握
 2. 中止基準・再開基準の設定
 3. 迅速に退避するための対応
 4. 日々の安全管理の徹底
- 2) 甲府市が定める標準的な工事等の中止基準は、次のいずれかの場合とする。
 1. 当該作業箇所または上流部に洪水または大雨の注意報・警報が発表された場合。
 2. 当該作業箇所または上流部に降雨や雷が発生している場合。

(3) その他

- 1) 道路、その他の周辺施設等を土砂等で汚染、または破損しないよう必要な防護措置を講じて作業を行うこと。万一、汚染された場合は、その都度、作業終了時に洗浄清掃

- すること。また、破損した場合は、監督員と協議の上で、善後措置を講ずること。
- 2) 作業終了後は速やかに使用機器、仮設物等を搬出し、作業場所の開放に努めること。
 - 3) 本工事箇所は病院に近接しているため、関係機関との協議を行い、緊急車両の通行や騒音・振動に十分配慮して作業を行うこと。

6 竣工図

請負者は、竣工時において発注者が作成方法を指定する竣工図を作成し、発注者に提出すること。

7 その他

本工事の特記仕様書において、定めのない事項については、必要に応じて発注者と請負者の間で協議して定めるものとする。

特記仕様書（管きょ更生工編）

1 一般事項

- （１）この仕様書（以下、本仕様書という。）は、甲府市上下水道局（以下、発注者という。）が管理する下水道管路施設の改良工事である「下水道改良工事（地震対策 R7-4）（余フ）」（以下、本工事という。）に適用するものとする。

なお、本工事に際しては、別の特記仕様書（共通編）による規定も遵守することとし、本仕様書は主に管きょ更生工についての内容を補完するものである。

これらを総じて本工事の特記仕様書とする。

- （２）本仕様書に定めのない事項については、特記仕様書（共通編）のほか、公益社団法人日本下水道協会監修『管きょ更生工法における設計・施工管理ガイドライン-2017年版-』（以下、ガイドラインという。）に加えて、甲府市監修『土木工事共通仕様書-令和5年度版-』及び山梨県県土整備部監修『建設工事必携-令和7年10月版-』により定められた規定、その他関係法令等を遵守すること。

2 工事概要

本工事は、過年度の管きょ内調査及び管路診断の結果から策定された甲府市公共下水道ストックマネジメント計画に基づき、改築対象路線となった管きょの更新を行うものである。

工事概要は（１）のとおりであり、各路線の内訳については（２）のとおりである。

（１）工事概要

1) 工 事 名	下水道改良工事（地震対策 R7-4）（余フ）
2) 工 事 場 所	甲府市中央三丁目地内ほか
3) 路 線 番 号	K117133053
4) 路 線 延 長	L=73m（内訳は後述の更生路線一覧表を参照。）
5) 更 生 延 長	L=71m
6) 既 設 管 種	ヒューム管（円形）
7) 既 設 管 内 径	φ 700mm
8) 既 設 管 勾 配	4.7‰
9) 既設管施工年度	昭和 39 年度
10) 作 業 区 分	施工時間帯は後述のとおりとする。
11) 工 法 分 類	複合管タイプの製管工法（嵌合製管）
12) 更生後の断面	既設管径 φ 700mm：更生管内径 φ 640mm ※上記については、設計工法による更生後の断面を示す。
13) 対象スパン数	1 スパン

(2) 更生路線一覧表

路線番号	布設年度 (年)	既設管径 (mm)	路線延長 (m)	更生延長 (m)	作業時間帯
K117133053	S39	φ 700	73.44	71.94	夜間施工

3 施工内容

施工内容については、次のとおりとする。ただし、これは管きょ更生工における設計工法での主たる標準作業の概要手順を示したものであり、準備や後片付け、仮設等の記述は含まない。また、後述の7の規定により、請負者による設計工法以外の工法選定について、発注者が施工承認した場合は、承認した工法の施工内容とする。

1) 管きょ内面被覆工

- ①既設管洗浄工：高圧洗浄機により、施工区間の管渠内の洗浄を行う。管渠内に突起物や欠損、浸入水などがある場合は、必要に応じて事前処理を行う。
- ②製管工：自走式製管機をマンホール内又は管路内に設置し、地上に置かれた内巻きプロファイルドラムから連続的にプロファイル（硬質塩化ビニル製の帯状材料）を製管機に送り込み、プロファイルをらせん状にかん合させ製管する。
- ③浮上防止兼支保工：浮上防止工により浮上を防止する。また、支保工により更生管の形状を保持する。
- ④裏込め材注入工：既設管と更生管の間に裏込め材を注入する。
- ⑤管口仕上工：注入用の管口シール部を施工範囲まで切削し、その切削部をモルタルで仕上げる。マンホール底部は更生管の肉厚（プロファイル厚み）分だけ段差が生じるため下水の円滑な流下を図るべくインバート部をモルタルですりつける。

4 現地調査

請負者は、本工事の着手にあたって現地調査を行い、施工現場の条件について次の事項を確認すること。

- 1) 道路状況（管理者、幅員、バス路線、通学道路、商店街等）
- 2) 道路使用許可条件（施工時間規制等を含む）
- 3) 周辺環境（騒音・振動規制、その他環境規制、用途種別等）
- 4) 進入路状況（迂回路、規制区間における沿線住民の利用状況等を含む）
- 5) 気象・気温
- 6) 既設管きょの路線延長・管体延長・管径
- 7) 既設管きょ内における流下水量・水位・流速
- 8) その他、工事を行うにあたり把握すべき必要事項

5 管きょの清掃

- (1) 請負者は、後述の6の規定による既設管きょの調査及び診断に先立って、事前に既設管きょ内の清掃作業を完了すること。
- (2) 作業方法については、公益社団法人日本下水道協会監修『下水道維持管理指針実務編 -2014 年版-』の規定を遵守し、作業にあたっては、公害防止及び環境保全等に係る関係法令に定める規制基準を遵守するために必要な措置を講ずること。
- (3) 作業にあたって、下流側に土砂等を流出させないこと。万一下流側に土砂等を流出させた場合は、影響区間の流出土砂を請負者の責任と負担において取り除くこと。
- (4) 作業に必要な洗浄水は、受託者が確保すること。
- (5) 清掃に伴い発生する土砂等の処分については、発注者が指定する甲府市浄化センター（大津町 1645）内の指定場所に搬入すること。
搬入時間の予定が判り次第、監督員へ随時連絡し、事前に指示を仰ぐこと。

6 既設管きょの調査・診断

- (1) 請負者は、後述の7の規定による工法の選定に先立って、潜行目視等により既設管きょ内の最新の状況を調査し、管きょ内面被覆工の施工にあたり支障となる不良箇所等、その他施工に係る必要事項を正確に診断すること。また、この調査結果については、発注者との協議により決定する様式にまとめ、工事打合簿にて提出すること。
- (2) 前項の調査を行う際に必要となる次の書類等については、発注者より貸与する。
 - 1) 本管用調査記録表（委託業務による調査成果）
 - 2) 管路内写真・人孔調査報告書・取付管調査報告書（委託業務による調査成果）
 - 3) 下水道台帳（当局所管のもの）
 - 4) その他、発注者が貸与可能と判断した資料

7 工法の選定

- (1) 本仕様書の適用工法は、管きょ（円形きょ）の更生工法における既設下水道管と更生材を一体化する複合管の製管工法（嵌合製管）によるものとする。
- (2) 請負者は、設計工法又は同等以上の工法を選定し、その選定した工法（以下、選定工法という。）の採用について、発注者からの承認（以下、施工承認という。）を受けること。なお、ここでいう同等以上とは、本工事の工事概要及び現場条件等において、支障なく施工が可能であるという理論及び実績等を勘案して、(4)の規定により同等以上の性能が確保されることを発注者が確認し、認める場合とする。
- (3) 請負者は工法を適用するにあたっては、(財)下水道新技術推進機構の建設技術審査証明書（レベル1・2耐震性能を含む）を取得している工法とする。
- (4) 本工事は、夜間施工とし、下水供用下の通水状態で施工するものである。施工時間は、原則として夜間施工で午後9時から午前5時とするが、天候や運転管理上の都合及び道路管理者や交通管理者からの指示等により、上記より短い時間となる場合がある。また、他の関連作業や水位及び水量等により、連日の施工が出来ない場合がある。

- (5) 選定工法における特許権に係る問題等については、請負者の責任と負担において解決すること。
- (6) 発注者が施工承認する必要条件として、選定工法が次の①から④までの事項を全て満たすことを証する書面一式をまとめ、「選定工法の施工承認願い」（以下、施工承認願いという。）として工事打合簿にて発注者へ提出すること。この工事打合簿にて発注者が施工承認した工法（以下、承認工法という。）により施工を行うこと。

- ① 6. の調査診断結果による既設管きよの流下条件及び不良箇所を踏まえて、下水供用下（通水状態）での施工が可能であること。また、下水供用を妨げることなく管きよの途中で施工を中断することが可能で、かつ打ち継ぎが可能であること。
- ② 選定工法が（財）下水道新技術推進機構の建設技術審査証明書（レベル1・2耐震性能が明示され、審査証明の期限が工事期間内において有効であるもの）を取得していること。
- ③ 選定工法による更生管きよが1（3）に定めるとおり、ガイドラインにおける「複合管の要求性能」を満たすこと。
- ④ 次の1）から3）までの条件を基に、選定工法における更生管きよについて構造計算及び耐震計算を行い、その結果が1）の設計条件下で構造的に問題ないこと。

1) 対象路線の設計条件

路線番号	管路区分	設計地震動	道路の設計活荷重	管きよの設計活荷重
K117133053	重要な施設	レベル1・レベル2	T-14	T-14

2) 既設管きよの残存強度評価条件

既設管きよの残存強度を見込むこととする。

既設管のコンクリート残存強度については、強度の残存率を100%見込み、圧縮強度を38N/mm²とする。

鉄筋強度・鉄筋量については、次のとおりとする。

・HPφ700

既設鉄筋残存強度	SR235(100%)	降伏点強度	235N/mm ²
配筋：内側	かぶり 35mm、鉄筋径 3.5mm、ピッチ 75mm 鉄筋量 128.300mm ² /m		

3) 既設管きよの設計土圧条件

既設管へ作用する鉛直土圧については、次の値を条件とする。

内部摩擦角：30°（砂質土）・単位体積重量：18（kN/m³）・粘着力：0（kN/m²）

静止土圧係数:0.5 土圧算定公式は直土圧式を採用する。また、設計条件として活荷重はT-14、砂基礎で基礎有効支承角を120°とし、自重及び水平土圧を見込むものとする。

8 施工計画書

- (1) 施工計画書の記載項目については、ガイドラインの「施工計画書に定めるべき事項」を網羅したものとし、記載内容についても、ガイドラインの規定を満たすこと。また、記載内容がガイドラインの内容を具体的にどのように満たすのかを明確に確認できるように、その内容に沿ったガイドラインの引用元の頁や工法協会等による資料を抜粋して添付し、発注者にその詳細を説明すること。
- (2) 施工計画書の提出にあたり、選定工法が設計工法と異なる場合については、7の規定による施工承認願いと同時期に発注者へ提出すること。また、この場合における発注者の書類審査には相応の期間を要するため、余裕を持って早期に提出すること。
- (3) 請負者は、施工計画書において、専門技術を修得した作業責任者を定め、施工時にはその者を現場に常駐させてその業務に従事させること。専門技術を修得した証として、ガイドラインにおける「管きょ更生工事の施工管理に関する資格」の資格者証に加えて、選定工法における協会が開催する技術研修を修了したことを証する書面を添付すること。

9 施工管理

- (1) 本工事の施工における施工管理、品質管理、出来形管理、安全管理については、ガイドラインの規定に従い、適切に実施すること。
- (2) (1)の各管理項目について、発注者が請負者に対してその管理手法に疑義が生じ、その妥当性や根拠を確認する必要がある場合には、その都度、ガイドラインにおける具体的な記述や承認工法の工法協会資料等を示し、発注者に説明して承諾を得ること。
- (3) 施工にあたり、(1)の規定に拠ることができない事項が判明した場合については、遅滞なく発注者と協議し、対応について判断を仰ぐこと。

10 安全管理

- (1) 一般事項
 - 1) 更生工の施工においては、材料・使用機器の十分な点検や適正な使用を心掛け、作業責任者の監視のもとでの作業等に留意し、事故発生の防止に努めること。
 - 2) 管路施設（マンホール、ますを含む）内作業時は、酸素濃度・硫化水素濃度等を計測するとともに、本管及び人孔内の換気を十分に行うこと。
 - 3) その他、道路使用条件や安全管理対策等について施工計画書に明記すること。
 - 4) 作業中は気象情報に十分注意を払い、豪雨出水及び地震等が発生した場合は、直ちに対処できるような対策を講じておくこと。なお、大雨等に関する気象情報により、相当の降雨が事前に予想される場合には、原則として当日の工事を中止すること。
- (2) 局地的な大雨に対する安全対策
 - 1) 管渠内で通水しながらの工事となることから、次の事項に係る安全管理計画を施工計画書に記載し、この内容について監督員の確認を得ること。また、作業員に対して安全管理計画の内容を周知させること。

- ①現場特性の事前把握
 - ②中止基準・再開基準の設定
 - ③迅速に退避するための対応
 - ④日々の安全管理の徹底
- 2) 甲府市が定める標準的な工事等の中止基準は、次のいずれかの場合とする。
- ①当該作業箇所または上流部に洪水または大雨の注意報・警報が発表された場合。
 - ②当該作業箇所または上流部に降雨や雷が発生している場合。

(3) その他

- 1) 道路、その他の周辺施設等を土砂等で汚染、または破損しないよう必要な防護措置を講じて作業を行うこと。万一、汚染された場合は、その都度、作業終了時に洗浄清掃すること。また、破損した場合は、監督員と協議の上で、善後措置を講ずること。
- 2) 作業終了後は速やかに使用機器、仮設物等を搬出し、作業場所の開放に努めること。

1 1 竣工図

請負者は、竣工時において発注者が作成方法を指定する竣工図を作成し、発注者に提出すること。

1 2 その他

本工事の特記仕様書において、定めのない事項については、必要に応じて発注者と請負者の間で協議して定めるものとする。